ISSN 0289－4130

設立30周年記念

研究紀要

第25号

事業団の沿革

30年のあゆみ

絡条体圧痕文の付く野島式土器　金子直行
－早期後葉における絡条体圧痕文の付く細隆起線文土器の関係性について－

縄文前期中葉から後葉土器群の系統関係とその意味　細田　勝

加曽利Ｅ式土器の終焉と称名寺式土器の関係　上野真由美

土偶研究とジェンダー考古学（Ⅰ）　小野美代子

荒川流域出土の大廓式土器について　栗岡　潤

関東地方における古墳時代前期の木器と低地遺跡　福田　聖

旧埼玉県立博物館収蔵品の鉄刀と刀装具について　瀧瀬芳之
－埼玉県内出土象嵌遺物の研究（その２）－

国界地域の土器流通　赤熊浩一
－下総国と武蔵国の様相－

地震で沈んだ倉と古代の集落　田中広明

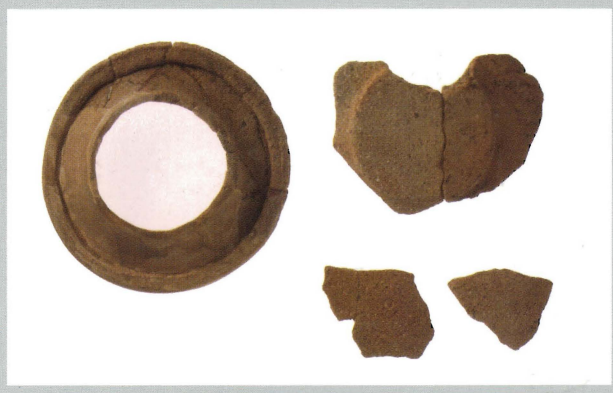
2011

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

口絵 1

1　白井沼遺跡出土大廓式土器

2　大型壺口縁部（白井沼）



3　複合口縁壺（白井沼）

4　鍛冶屋・新田口遺跡（非掲載）

5　大型壺口縁部（川合遺跡）

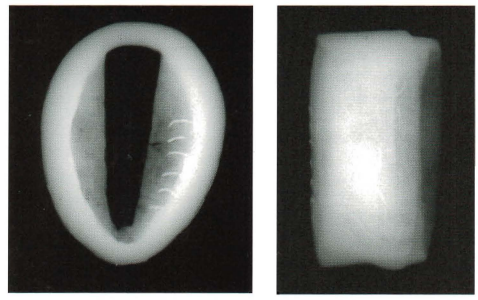
6　大型壺口縁部（川合遺跡）

7　大型壺口縁部（川合遺跡）

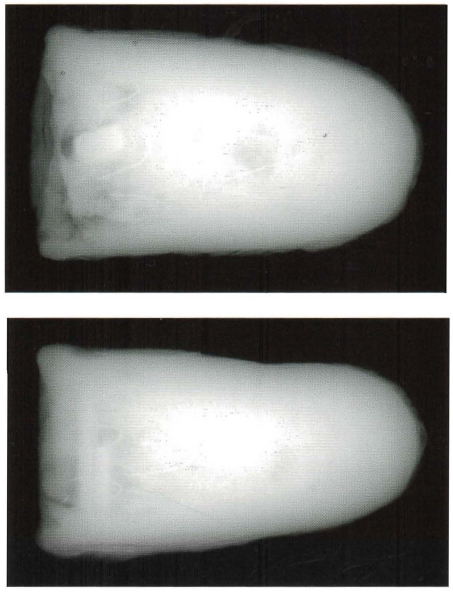
8　大型壺口縁部（川合遺跡）

瀧瀬論文　X線透過写真

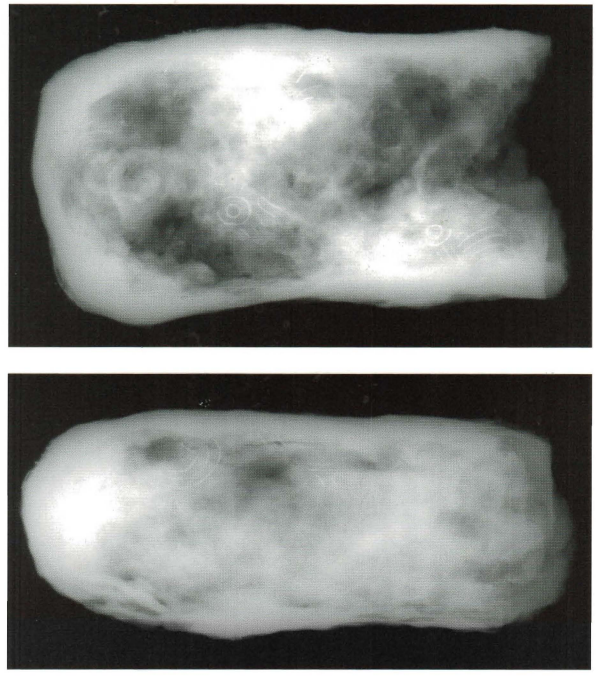
SPM88-041-12



SPM88-041-16



SPM88-041-63



SPM88-041-64

旧埼玉県立博物館収蔵品の鉄刀と刀装具について

―埼玉県内出土象嵌遺物の研究（その２）―

瀧瀬芳之

要旨　旧埼玉県立博物館に収蔵されていた鉄刀と刀装具の資料化を目指して、X線透過調査を実施した。その結果、児玉郡内古墳出土とされる鉄刀と刀装具のうち、４点の刀装具に象嵌が施文されていることが判明した。鉄刀の型式や象嵌文様などから、これらの資料にはおおむねTK209型式期（６世紀末）の年代が与えられる。また、今回発見された象嵌文様のうち、羽状文を対象として、同系統の鋸歯文と鱗状文を含めた編年作業を行い、８つの段階を設定して変遷過程を示した。

はじめに

埼玉県文化財収蔵施設には、「児玉郡内古墳出土」とされる古墳出土品が収蔵されている。これらは、旧埼玉県立博物館（現埼玉県立歴史と民俗の博物館・以下旧県博と記載する）が、県北在住の収集家から、平成元（1989）年３月に購入したものである。資料の内容は、鉄刀・刀装具・鉄鏃・馬具（轡・雲珠・杏葉など）で、旧県博の受入番号はSPM88-041-01～92である（埼玉県立博物館1992）。

馬具のうち一部は、関・宮代両氏によって紹介されている（関・宮代1987）ものの、その他の資料は、ほとんど公開されることなく現在に至っている。わずかに、昭和59（1984）年８月11日から10月７日まで、岩手・埼玉文化交流展として岩手県立博物館で開催された『北武蔵　杖刀人とその時代』で、購入前の当該資料を含む出土品が、個人の収集品として展示された経歴がある（埼玉県立博物館1984）。

本論は、これらの資料のうち、鉄刀と刀装具の資料化を行い、考古学的価値を明らかにすることを目指すものである。出土古墳や共伴関係に関するデータが欠如している資料ではあるが、だからといって、考古学的資料として研究の俎上にのせるための基本的な作業をおろそかにする理由にはならない。また、本資料に含まれる有窓鐔や円頭刀装具（柄頭・鞘尻）などの刀装具には、象嵌装飾が施されている割合が高く（瀧瀬・野中1997）、X線透過調査を実施することによって新たな知見を得られる可能性もある。

また、あわせて、同じく旧県博の収蔵資料である鉄刀についても紹介する。受入番号SPM69-061の川越出土品、及びSPM69-261-03の出土地不明品である。これらは、旧県博の建設以前に同地にあった埼玉県立文化会館の収蔵資料で、昭和46（1971）年、旧県博の開館に伴い、引き継がれたものである（埼玉県立博物館1979）。

埼玉県立文化会館は、昭和23（1948）年に設立し、講演・講座・図書閲覧・展示会・刊行物の出版など、社会教育の各方面にわたるさまざまな活動を行い、戦後の県内文化活動の拠点となった施設である。昭和32（1957）年には、文化財保護の啓発普及を目的として付属の郷土館が開設され、生産文化財資料・民俗資料・考古資料など、郷土の文化財を広く収集展示していた（埼玉県教育委員会1977・埼玉県1991）。昭和37（1962）年11月に開催された「古墳とはにわ展」では、埴輪をはじめ大刀や装身具など合計200点以上が一堂に出展され、県内で初めての催しとして注目された（埼玉県立文化会館1963）。この２点の鉄刀は、このような経緯の中で、埼玉県立文化会館に寄贈もしくは収集された資料と考えられるが、残念ながら出処や来歴は明らかになっていない。

1　資料詳細

この章では、個々の資料の寸法を含む現状の状態について記載する。

（1）児玉郡内古墳出土品

対象とするのは鉄刀８振り・鐔４点・縁金具２点・鏃２点・鵐目１点・円頭刀装具２点である。記述は旧県博の登録番号順とする。

SPM88-041-01　鉄刀（第１図１）

旧県博資料名称は「直刀」とあるが、鉄刀と記載する（以下同じ）。

平造り・両関の鉄刀である。劣化のため刃の一部が剥落する。全長793㎜（茎長98㎜・刃長695㎜）、刃幅30～22㎜、背幅５～４㎜、重さ459.4ｇである。関は背関がやや浅いが均等両関の範囲内と考えられる。茎は茎尻に向けてやや幅を減ずる中細茎で、茎尻は栗尻である。目釘孔はない。

SPM88-041-03　鉄刀（第１図２）

平造り・片関の鉄刀である。刃・背の一部と、切先の先端をわずかに欠く。現存長897㎜（茎長161㎜・刃現存長736㎜）、刃幅35～28㎜、背幅６～５㎜、重さ717.1ｇである。刃関は一部欠損しているため形状ははっきりしないが、やや曲線をなして切れ込む撫角と推定される。茎は、関からの切り込みが深く、茎尻に向けて幅がほとんど変化しない類直茎で、茎尻は直線状の一文字尻である。目釘孔は肉眼では明瞭ではないが、Ｘ線検査で３か所に確認された。均等に配されており、孔径は５～４㎜である。同様に、径４㎜の鏃元孔が関から３㎝ほど離れた位置に確認された。全体的に劣化が進み、剥落が著しいため、断面図は一部復元して示している。

SPM88-041-04　鉄刀（第１図３）

平造り・片関の鉄刀である。茎尻を欠き、劣化による刃の剥落が著しい。現存長898㎜（茎推定現長125㎜・刃推定現存長773㎜）、刃幅推定32～26㎜、背幅６㎜前後、重さ577.8ｇである。刃関は欠損しているため形状は不明である（図では撫角関に復元）。茎は、関から深く切れ込み、茎尻にかけて幅を狭める細茎と推定される。Ｘ線検査で径５㎜の目釘孔が１か所に、径５㎜の鏃元孔が確認された。

SPM88-041-05　鉄刀（第１図４）

平造り・両関の鉄刀である。刃の一部が剥落し、切先の先端をわずかに欠く。全長691㎜（茎長90㎜・刃長601㎜）、刃幅27～24㎜、背幅７～５㎜、重さ450.5ｇである。関は均等両関である。背関が浅い二段関となっているが、これはおそらく鏃が装着された痕跡とみなされる。茎は栗尻中細茎である。茎尻に近い部分に目釘が残っている。

SPM88-041-06　鉄刀（第１図５）

平造り・両関の鉄刀である。刃と背の一部が剥落し、切先及び茎尻の先端をわずかに欠く。現存長622㎜（茎現存長115㎜・刃現存長407㎜）、刃幅30～24㎜、背幅９～６㎜、重さ432.8ｇである。関は均等両関である。背関が緩やかな二段関となっているが、鏃が装着された痕跡であろう。茎は中細茎であるが、茎尻が尖る特異な形状を呈している。目釘孔は存在しない。

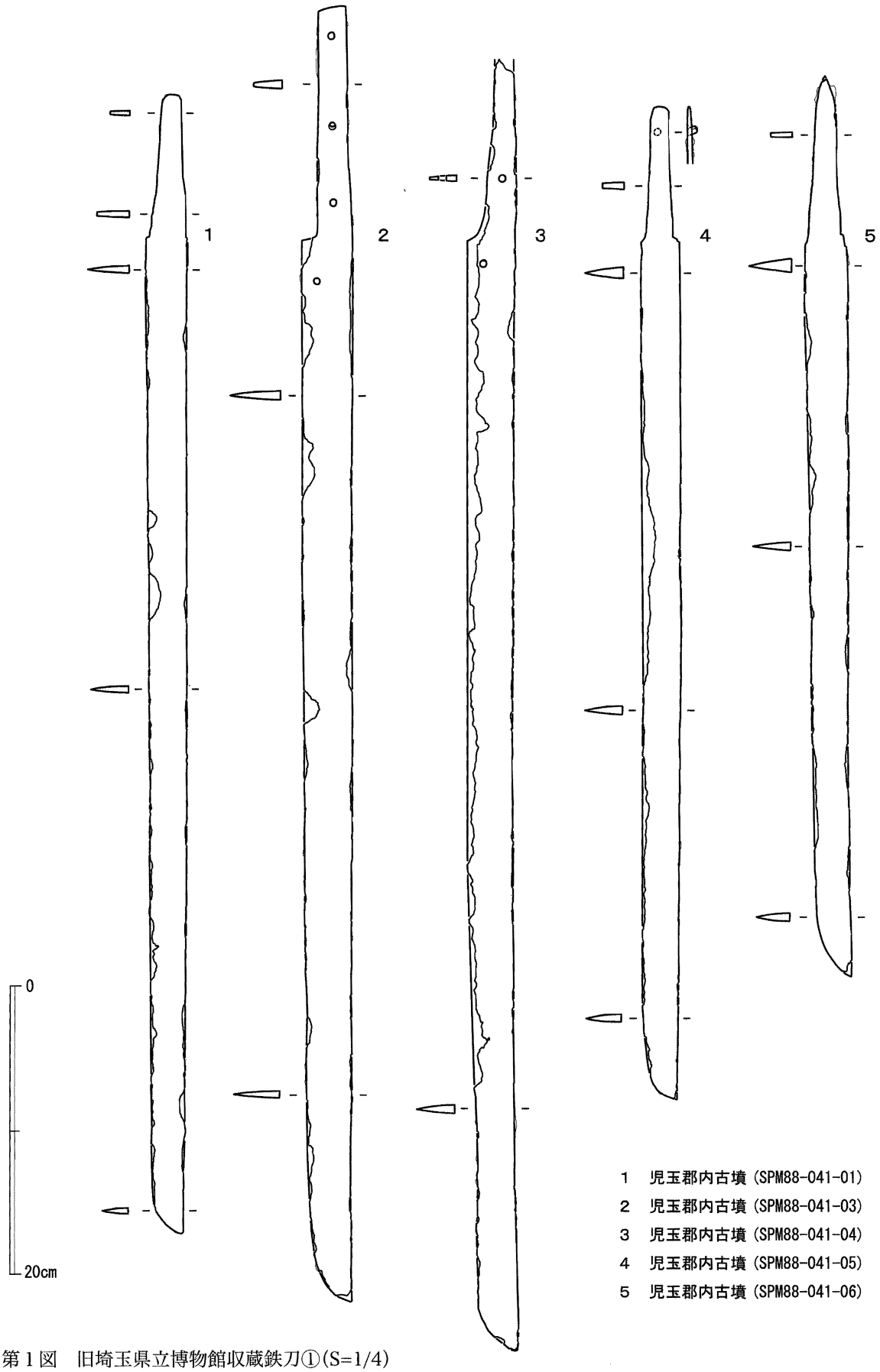
SPM88-041-07　鉄刀（第２図１）

平造り・両関の鉄刀である。刃関と茎の大半が失われ、刃と背の一部も剥落している。切先も剥落が著しく、形状は推定である。現存長641㎜（茎現存長18㎜・刃現存長623㎜）、刃幅23～20㎜、背幅５㎜、重さ309ｇである。関は均等両関と推定される。

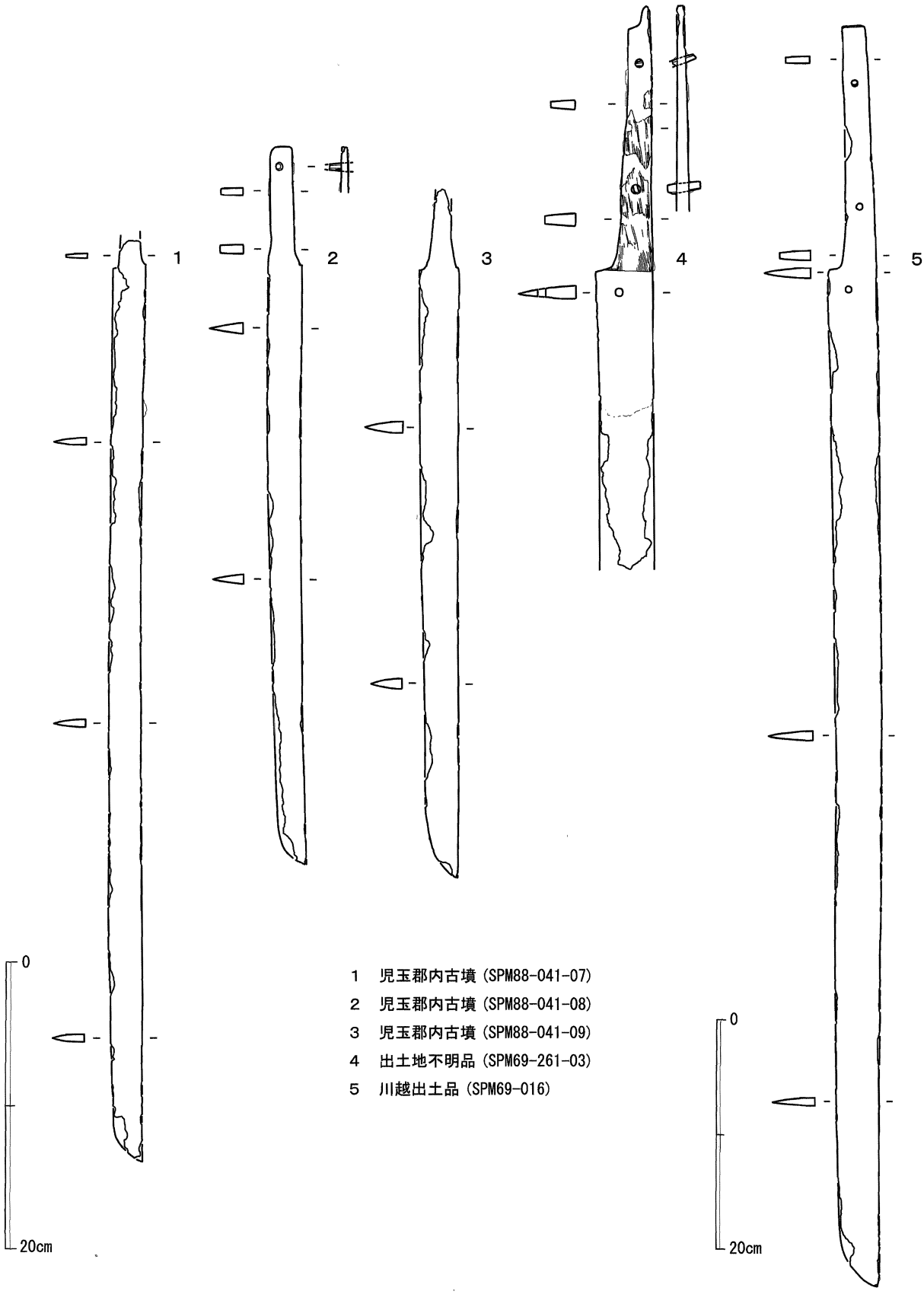
SPM88-041-08　鉄刀（第２図２）

平造り・両関の鉄刀である。刃の一部が剥落し、切先にかけて大きく失われている。全長502㎜（茎長82㎜・刃長420㎜）、刃幅24～20㎜、背幅８～５㎜、重さ253.9ｇである。刃関は不明瞭で、なだらかに移行する。背関には鏃がはめこまれた痕跡がある。茎は一文字尻直茎である。茎尻に近い部分に目釘が残る。

SPM88-041-09　鉄刀（第２図３）



第１図　旧埼玉県立博物館収蔵鉄刀①(S=1/4)



第２図　旧埼玉県立博物館収蔵鉄刀②（１～４：S=1/4　５：S=1/5）

平造り・両関の鉄刀である。茎は劣化が著しく、刃も一部が剥落している。現存長481㎜（茎現存長55㎜・刃現存長426㎜）、刃幅28～23㎜、背幅８～６㎜、重さ320.5ｇである。関は均等両関である。茎は茎尻の幅をすぼめた先細の細茎と推定される。目釘孔はない。

SPM88-041-10　鐔（第３図１）

鉄製の矩形八窓鐔である。大きさは長径87㎜・短径76㎜。茎孔径は推定で40×26㎜、厚さ３～５㎜、重さ64.3ｇである。茎孔を中心に大きく欠損しており、透かしのうち３か所の形状は推定である。有窓鐔には象嵌が施される可能性が高いが、本例には認められなかった。なお、本例は『北武蔵　杖刀人とその時代』の図録番号（以下『図録』番号と記載する）79の写真上段中央の鐔と同一品である。

SPM88-041-11 鐔（第３図２）

鉄製の無窓鐔である。表面の一部は劣化し剥落している。大きさは長径68㎜・短径56㎜、茎孔径31×17㎜、厚さは耳で４㎜・茎孔で３㎜、重さは54.6ｇである。象嵌はない。

SPM88-041-12 鐔（第３図３）

鉄製の無窓鐔である。１／４ほどが劣化し剥落しており、茎孔側の一部が欠落する。表面には、おそらく旧所有者によるものであろう研磨が施されている。大きさは長径65㎜・短径57㎜、茎孔径29×(17)㎜、厚さは耳で５㎜・茎孔で２㎜、重さは46.4ｇである。本例では耳にのみ象嵌が確認された。象嵌の材質は不明であるが、おそらく銀と考えられる。

象嵌はＣ字状文が間隔を開けて施文されていることは判別できるが、欠落が多く、また耳部におけるＸ線の観察には限度があるため、その全容は明瞭でない。

SPM88-041-13 縁金具（第３図４）

旧県博資料名称は「責金具」とあるが、縁金具もしくはその大きさから柄頭の切羽と考えられる。鉄製である。柄頭の切羽とすると、頭椎大刀か大形の円頭大刀に装着されていた可能性がある。大きさは長径63㎜・短径49㎜。孔径45×34㎜、厚さ４～６㎜、重さ31.2ｇである。象嵌はない。

SPM88-041-14　縁金具（第３図５）

旧県博資料名称は「責金具」とあるが、縁金具もしくは切羽と考えられる。鉄製である。大きさは長径53㎜・短径41㎜。孔径37×26㎜、厚さ３㎜、重さ13.3ｇである。象嵌はない。

SPM88-041-15　鐔（第３図６）

旧県博資料名称は「責金具」とあるが、鉄製の無窓鐔で、喰出鐔と考えられる。大きさは長径43㎜・短径32㎜。茎孔径23×15㎜、厚さ4.5㎜、重さ17.9ｇである。状態は良好で、一方の面には縁金具あるいは鎺が接していた痕跡がある。象嵌はない。本例は『図録』番号79の写真下段右端の鐔と同一品である。

SPM88-041-16　鎺（第３図７）

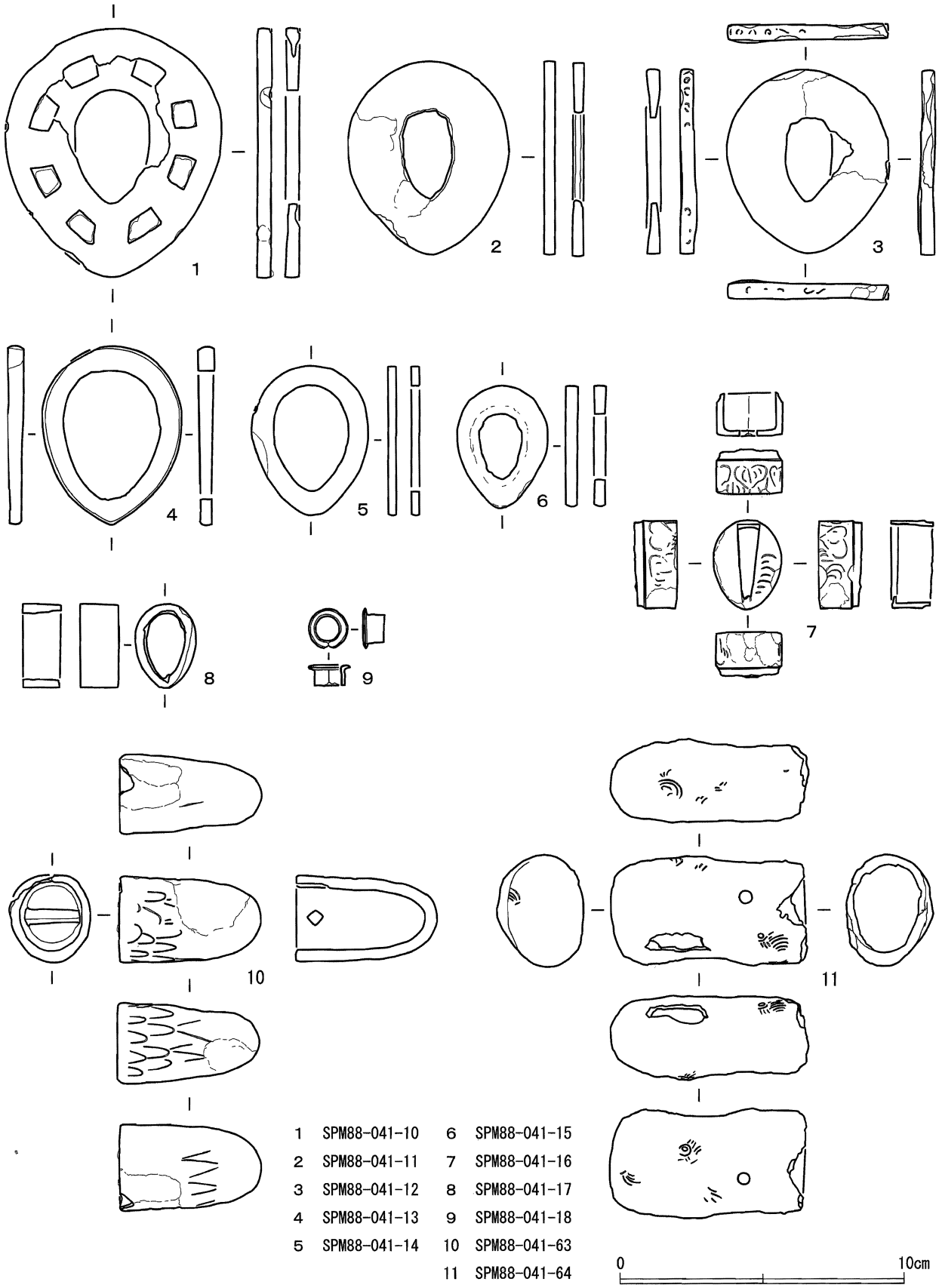
鉄製の鎺である。大きさは長径31㎜・短径24㎜。長さ15㎜、厚さ１～２㎜、重さ23ｇである。堰金を設けるタイプの鎺である。象嵌が施されているが、研磨されているためか、外面の象嵌はほとんど剥落しており、象嵌溝のみが肉眼で観察される。堰金の象嵌はかろうじて一部残っていることが確認された。

象嵌の文様はハート形のモチーフを連続させたもので、単位は６単位である。ハート形の内部と余白には旋状文を充填させている。堰金に残る象嵌は旋状文で、おそらく全面に施されていたものと推定される。なお、本例は『図録』番号79の写真下段右から２番目の鎺と同一品である。

SPM88-041-17　鎺（第３図８）

鉄製の鎺である。大きさは長径30㎜・短径21㎜。長さ13㎜、厚さ３㎜、重さ14.7ｇである。一枚板を巻いて刃側で鍛接した筒状の鎺である。象嵌はない。

SPM88-041-18　鵐目（第３図９）



第３図　旧埼玉県立博物館収蔵刀装具(児玉郡内古墳出土)（S=1/2)

金銅製の鵐目である。大きさは外径14㎜・内径８㎜。高さ７㎜、厚さ１㎜、重さ1.3ｇである。厚さ約１㎜の銅板を筒状にまわして蝋付けし、一方の縁を叩いて広げている。鍍金は表面（可視範囲）にのみ施されている。

SPM88-041-63　円頭刀装具（第３図10）

鉄製の円頭状の刀装具である。長さ50㎜、縁径30×28㎜、厚さ３㎜前後、重さ61.4ｇである。縁近くを断面方形の目釘が貫通する。X線透過調査の結果、連続する半楕円文と山形文を組み合わせた羽状文の象嵌が施されていることが確認された。羽状文の積み重ねは部分的に崩れているが、３段に配されている。図化はX線写真で確認された象嵌を、切り合いや表面の状態を考慮に入れて各面に割り付けて行った。そのため、その位置関係はかならずしも正確ではない。模式図と考えていただきたい。

旧県博資料名称では「柄頭」とされるが、鞘尻の可能性もあるため、円頭刀装具としておく。なお、本例は『図録』番号80の写真左から３番目と同一品である。

SPM88-041-64　柄頭（第３図11）

鉄製の柄頭である。端部の平面形は方頭に近いが、刃側に向けてしも下がりになるところから、円頭柄頭と考えてよいだろう。肉眼では確認できないが、径４㎜ほどの懸通孔がやや背寄りにあけられている。鵐目は存在していない。長さ69㎜、縁径39×28㎜、厚さ５㎜前後、重さ80.1ｇである。本例にも象嵌が施されていることが判明したが、劣化が進み、表面の剥落も著しいため、象嵌はほとんど残存していなかった。材質はおそらく銀象嵌であろう。文様はわずかに残る二重円文と旋状文から、亀甲繋文と考えられる。象嵌の配置は、前例と同様に、X線写真から模式的に作図した。なお、本例は『図録』番号80の写真左から２番目と同一品である。また、本例と63の鞘尻は、かつて拙稿で紹介したことがある（瀧瀬1991第３図５）。

（２）川越出土品

SPM69-016　鉄刀（第２図４）

平造り・片関の鉄刀である。茎・刃・背の一部を欠く。全長1,200㎜（茎長212㎜・刃長988㎜）、刃幅42～35㎜、背幅９～６㎜、重さ1,325ｇである。刃関は曲線をなしてやや深く切れ込む撫角で、茎は一文字尻類直茎である。径５㎜の目釘孔が２か所均等に配置されている。鎺元孔は径５㎜である。

（３）出土地不明品

SPM69-261-03　鉄刀（第２図５）

平造り・片関の鉄刀である。茎尻の一部と刃の大半を欠く。現存長392㎜（茎長184㎜・刃現存長208㎜）、刃幅40～38㎜、背幅９㎜、重さ351.5ｇである。刃関は深く弧を描いて切れ込み、茎胴部は細で、茎尻は隅を弧状にえぐり落とした隅抉尻である。径５㎜の目釘孔が２か所均等に配置され、内部には扁平な平釘が残っている。鎺元孔は径６㎜である。茎の表面には柄木の木質が付着しており、柄木がどこまで及んでいたか、その境が明瞭である。刀身佩裏にはその境と接するように鞘木の木質が残っており、この刀が鐔や鎺などの金属製装具をもたない木装の拵をもっていたことが分かる。なお、本資料の刀身と考えられる破片（SPM-261-01・02）も同時に保管されているが、剥落が著しく、原形をほとんどとどめていないため図化しなかった。

２　所見

本章では、各資料について、おもにその年代に関して所見を述べる。

（１）児玉郡内古墳出土品

鉄刀は臼杵分類（臼杵1984）を基準にまとめると以下のようになる。

01：均等両関栗尻中細茎

03：撫角？片関一文字尻類直茎

04：片関細茎

05：均等両関栗尻中細茎
06：均等両関尖尻中細茎
07：均等両関？
08：均等？両関一文字尻直茎
09：均等両関細茎

06の茎尻は臼杵氏の分類にない特殊なものであるため、新たな形制を設定した。２振りある片関の大刀のうち、03が該当すると思われる撫角片関一文字尻類直茎の鉄刀の年代は、古墳時代中期から後期にかけて、須恵器型式でいうとTK10～TK209型式期とされている。両関の鉄刀では、01・05が該当する均等両関栗尻中細茎の鉄刀が、TK209～TK217式期に盛行したと考えられている。他の両関の鉄刀も、身幅が30㎜前後と細身で、全長も500～700㎜に収まるので、それと同様の年代観があてはまるのではないかと考えられる。

刀装具では、10のような矩形八窓鐔は、TK43～TK217型式期までみられるが、10は整った倒卵形の形状や、均等な配置の透かしなどから、後出のものではなさそうである。13の大形の柄頭縁金具は、鉄装あるいは木芯円頭大刀や頭椎大刀の一具である可能性が高い。したがって、その年代はTK209型式期が中心となろう。他の無窓鐔など、象嵌のない鉄製刀装具や金銅製鵐目の帰属時期は、明確な根拠はないが、おおむねTK43～TK209型式期に収まるものと考えられる。

12は耳にのみ象嵌を施す無窓鐔である。その文様はおそらく単純にC字形の文様が連続する「C字状文」か、波状文を中心として交互にC字形の文様が連続する「波状C字状文」と考えられる。年代は、ともにTK209型式期の前半代に求められよう(瀧瀬・野中1996)。本例のように、耳にのみ象嵌を施した無窓鐔は、類例が少なく、管見では本例のほかに13の出土例があるにすぎない。埼玉県では桶川市西台３号墳（塩野・増田1970・註１）についで２例目となる。

16のハート形文を施す鎺は、これまで全国で27の類例があるが、県内では美里町広木大町９号墳から出土している（瀧瀬・野中1996)。広木大町９号墳例は、鎺と鐔の平にハート形文・耳に波状C字状文を施す象嵌装大刀で、時期は、耳の文様からTK209型式期でも前半期のもの考えられる。ハート形文のデザインは本例と酷似しており、ほぼ同様の年代が与えられよう。

63は羽状文を施す円頭刀装具であるが、その文様から鞘尻の可能性が高いと考えられる。本例を含めたこの系統の象嵌刀装具についての所見は、次章で詳述したい。

64のように亀甲繋文を施した象嵌柄頭は、管見では、全国で、円頭・頭椎・圭頭柄頭を含めて60の出土例を確認している。うち、県内での出土例は、円頭大刀が本庄市秋山古墳群（埼玉県1951/瀧瀬・野中1996）と神川町青柳古墳群南塚原支群72号墳（田村1996a）から、頭椎大刀が美里町塚本山137（県報告19）号墳（増田 他1977/瀧瀬・野中1996）から出土している。本例は４例目に当たるが、すべて児玉郡市内から発見されていることは興味深い。64は、その文様がほとんど残っていないため、比較検討するデータは乏しいが、かろうじて繋線が三重線で、支点が二重円文であることと、亀甲内に旋文が多用されていることがわかる。これは、橋本編年（橋本1993）の主として第三段階（秋山古墳群例を含む）から第四段階にかけての亀甲繋文にみられる特徴といえる。第三段階には６世紀末の年代が与えられている。

（２）川越出土品

臼杵分類によると撫角片関一文字尻類直茎の鉄刀に該当し、TK10～TK209型式期という年代観が与えられている。

（３）出土地不明品

撫角片関隅抉尻細茎の鉄刀である。この形制の大刀の年代はMT15～TK209型式期にあたると考えられている（臼杵1984)。

3　鋸歯文・鱗状文・羽状文を象嵌する円頭・方頭刀装具について

本章では、今回新たに確認された児玉郡内古墳出土の象嵌刀装具のうち、羽状文を施す円頭刀装具について考察していく。まず、県内をはじめ全国の類例を集成して分類・編年作業を行ない、本例の年代的位置づけを明らかにする。次に、これらの文様がもつ意味合いを再考し、象嵌文様の羽状文がどのように成立し、展開していったか、その過程を示したい。

（1）概念規定

従来、象嵌の文様には、明確な概念規定がなされていないことが多い。そこで、今回改めて次のように規定する。

羽状文：①半円・半楕円文の連続もしくは積み重ね、②山形文の連続、③山形文、半円・半楕円文の頂点から延びる線（「頂線」と仮称する）で構成されるもの。①と②、①と③で構成される場合も含む。

羽状文を構成する要素のひとつとしてとらえられる①と②の文様は、単独でも施文されることが知られている。これらの文様は、互いに密接に関連しているものと考えられるため、次のように定めて、分析の対象に含むことにする。

鋸歯文：山形文が連続するもの。

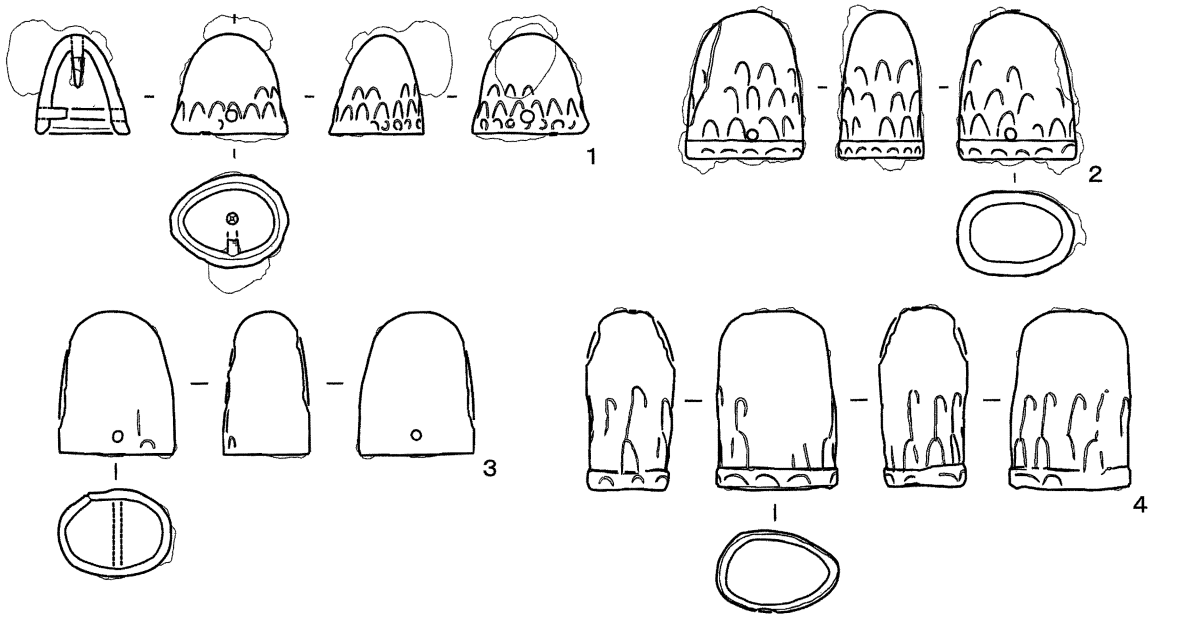
鱗状文：半円文・半楕円文が２段以上交互に積み重なるもの。

（2）資料集成

現在までに鋸歯文・鱗状文・羽状文が施されている円頭・方頭刀装具は、管見では全国で47の出土例がある（第１表）。今後、保存処理に伴うＸ線透過調査が行われることにより、さらに出土例が増加していくことが見込まれる。

分布は、関東地方と畿内にやや集中する傾向にあるが、宮城県から福岡県まで、幅広く散在していることがわかる。

県内では、本例のほかに、桶川市原山23号墳（第４図１）、熊谷市円山２号墳（同図２）、滑川町大道古墳（同図３）、神川町青柳古墳群四軒在家支群８号墳（同図４）から出土している（註２）。



1　桶川市　原山 23 号墳（R3 No.12）
2　熊谷市　円山２号墳（R2b No.13）
3　滑川町　大道古墳（U5? No.14）
4　神川町　青柳古墳群四軒在家支群８号墳（U4b No.15）

第４図　埼玉県内の類例（S=1/2）　　（No.）は第１表のNo.と同じ

第１表　鋸歯文・鱗状文・羽状文象嵌資料集成表

No.	遺跡名 (所在)	遺構 (規模m)	形状	目釘	文様 (図No.)	出土状況	共伴象嵌装具付鉄刀・刀装具（文様）	文　献
1	住社遺跡古墳周溝 (宮城県角田市)	古墳	円	横	U３b (５-11)	周溝出土		中村 他1991
2	白穴横穴墓群東１号横穴（福島県いわき市）	横穴墓	円	横	R２a (６-20)	単独出土		高島・馬目2010
3	中田横穴 (福島県いわき市)	横穴墓	偏円	横	U３a	詳細不明	円頭刀装具（ハート形文）	いわき市1971/ 鈴木2004/ 森2004
4	郭内８号横穴墓 (福島県白河市)	横穴墓	偏円	横	U３a (５-９)	詳細不明	鎺（渦状文）付鉄刀	寺島 他1981/ **白河市歴史民俗資料館1983**/ 鈴木2004/ 森2004
5	梶山古墳 (茨城県鉾田市)	円墳（40）	円	横	R２a (６-21)	石棺内で向きをそろえた10振りの大刀群の最上部柄寄りから出土	円頭柄頭（亀甲繋文）/ 無窓鐔（耳：不明・平：ハート形文）・鎺（ハート形文）付鉄刀	汀 他1981/ **西山1986**/ 橋本1993
6	荒久台12号墳 (栃木県益子町)	円墳（22）	短円	横	R４ (６-25)	攪乱層出土	円頭刀装具（ハート形文）	益子町1987
7	井出二子山古墳 (群馬県高崎市)	前方後円墳（108）	方？	—	U1b (５-３)	トレンチ出土		若狭 他2009
8	山名原口Ⅱ遺跡２号墳 (群馬県高崎市)	円墳(16)	円	横	U２a (５-５)	単独出土	八窓鐔（耳：波状Ｃ字状文）	福田・神戸1991/ 高崎市観音塚考古資料館2008
9	台所山古墳 (群馬県伊勢崎市)	円墳（30）	方	なし	K１ (５-１)	石棺内より一括出土	素環頭（縁取り線）大刀 / 柄頭筒金（亀甲繋花文）/ 一窓鐔（波状文）/ 鞘口（亀甲繋花文）	福島1925/ 東京国立博物館1983/ **町田1986**
10	東小保方町出土 (群馬県伊勢崎市)	不明	円	横？	R２a	詳細不明	無窓鐔（不明）・鎺（不明）付鉄刀 / 無窓鐔（耳：不明・平：圏線Ｃ字状文）	東京国立博物館1983/ 村岡・関・徳江1998
11	松本23号墳 (群馬県邑楽町)	円墳（12）	円	縦	U４a	象嵌装具付鉄刀の切先寄りから出土	柄縁金具（半円文）・八窓鐔（耳：交互重半円文・平：渦文）・鎺（渦文）付鉄刀	村岡1989/ 村岡・関・徳江1998
12	原山23号墳 (埼玉県桶川市)	円墳	短円	複合	R３ (４-１)	象嵌装大刀の柄頭	鎺（ハート形文）付鉄刀	塩野 他1978
13	円山２号墳 (埼玉県熊谷市)	円墳（18）	偏円	横	R２b (４-２)	詳細不明		埼玉県1982/ 若松1985
14	大道古墳 (埼玉県滑川町)	円墳（17）	偏円	横	U５？ (４-３)	単独出土		木村 他1986/ 瀧瀬・野中1996
15	青柳古墳群四軒在家支群８号墳 (埼玉県神川町)	円墳（10）	円	なし	U４b (４-４)	単独出土		田村1996b
16	(埼玉県児玉郡)	古墳	偏円	横	U１c (３-10)			埼玉県立博物館1984
17	駄ノ塚古墳 (千葉県山武市)	方墳（60）	偏円	横	R３ (６-23)	刀装具は散在して出土	頭椎柄頭縁金具（重半円＋半円文）/ 有窓鐔（耳：対抗半円文・平：Ｓ字状文）/ 縁金具（対抗半円文）	白石 他1996
18	多摩川台９号墳 (東京都大田区)	円墳（18）	偏円	縦	R３ (６-24)	象嵌のない装具付鉄刀に伴うとされる	八窓鐔（耳：交互重半円文・平：渦文）・鎺付鉄刀	梅沢・白石・諸星1957/ **清水1995**

No.	遺跡名 (所在)	遺構 (規模m)	形状	目釘	文様 (図No.)	出土状況	共伴象嵌装具付鉄刀・刀装具（文様）	文　献
19	二子塚古墳 (神奈川県秦野市)	前方後円墳（46）	円	なし？	U2a	単独出土		秦野市桜土手古墳展示館2010
20	諏訪脇横穴墓群 (神奈川県二宮町)	横穴墓						柏木2004
21	須曽蝦夷穴古墳 (石川県七尾市)	方墳（21）	方	なし	R2b (6-22)	象嵌装円頭大刀の一具（鞘尻）	円頭柄頭（亀甲繋文）/柄頭縁金具（S字状文）/八窓鐔（耳：不明・平：圏線円文）/鏃（S字状文）/鞘口（S字状文）/足金物2（対抗重半円文）/責金物2（S字状文）	冨田1992/冨田　他2001
22	茶臼山古墳群馬塚支群1号墳 (福井県越前市)	円墳（9）	円	縦	U4a (6-16)	鉄刀の切先近くから出土	縁金具（半円文）	齋藤 他2001
23	湯谷1号墳 (長野県長野市)	円墳（11）	円	横	U4a	詳細不明	圭頭柄頭（亀甲繋文）	矢口 他1981/長野県史刊行会1988
24	御猿堂古墳 (長野県飯田市)	前方後円墳（65）	方	なし？	U1b	不明	円頭柄頭（亀甲繋文）	長野県史刊行会1983・1988/澁谷2007
25	本郷大塚古墳 (長野県須坂市)	円墳（16）	弧	縦	U4a (5-15)	鉄刀群より離れて単独出土	柄縁金具（半円文）・八窓鐔（耳：対抗半円文・平：ハート形文）・鏃（円文）付鉄刀	泉森 他1992
26	釜石古墳 (長野県茅野市)	円墳	円	不明	U3b?	鏃付鉄刀の切先に挿入されて出土（鞘尻）	無窓鐔（平：渦文）	宮坂1967/長野県史刊行会1988
27	宮之脇2号墳 (岐阜県可児市)	円墳	偏円	縦	U4a (5-13)	象嵌装具付鉄刀との位置関係不明	柄頭縁金具（半円文）/八窓鐔（耳：刻目・平：圏線C字状文）・鏃（圏線C字状文）付鉄刀	中島　他1976/岐阜県博物館1983/**岩原2006**
28	四ッ池19号墳 (静岡県浜松市)	円墳	短円	なし	R4 (6-26)	単独出土		加藤 他1986
29	明ヶ島15号墳 (静岡県磐田市)	円墳（19）	円	なし	R1b (6-19)	刀装具は散在して出土	鞘口（龍文）/柄頭縁金具（交互重半円文）	室内 他2003
30	駮馬炭焼古墳 (愛知県吉良町)	円墳（8）	円	横	R2b?	象嵌装具付鉄刀の切先近くから出土	柄縁金具（半円文）・無窓鐔（耳：渦状文・平：ハート形文）・鏃（ハート形文）付鉄刀	三田2010
31	平田14号墳 (三重県津市)	方墳（12）	円	横	U5 (6-18)	象嵌装木芯円頭大刀の鞘尻	柄頭縁金具（半円文）・無窓鐔（耳：半円文・平：渦状文）・鏃（円文）付木芯円頭大刀	伊藤 他1987
32	丸尾山古墳 (三重県名張市)	円墳（18）	方	なし	U1a (5-2)	単独出土		門田1999
33	楢崎29号墳 (滋賀県多賀町)	円墳（13）	偏円	縦	U4b (6-17)	単独出土		本田 他2003
34	下山40号墳 (京都府福知山市)	円墳（15）	円	なし？	U4a?	詳細不明	八窓鐔（耳：不明・平：ハート形文）	崎山1993・1994/豊島2001
35	高山12号墳 (京都府京丹後市)	円墳（18）	偏円	縦	U3a (5-8)	詳細不明	縁金具（重半円文）	増田　他1988/**増田1988**
36	湯舟坂2号墳 (京都府京丹後市)	円墳（17）	偏円	縦	U4a (5-14)	装具付鉄刀1振りの近くから出土		奥村・新納1983

No.	遺跡名 (所在)	遺構 (規模m)	形状	目釘	文様 (図No.)	出土状況	共伴象嵌装具付鉄刀・刀装具（文様）	文　献
37	長原七ノ坪古墳 (大阪府大阪市)	前方後円墳（24）	方	縦	K1	詳細不明		高井1987/伊藤1988
38	出雲井５号墳 (大阪府東大阪市)	円墳（15）	円	不明	R1a	詳細不明		中西1998
39	楯縫古墳 (兵庫県豊岡市)	円墳（30）	偏円	横	U3b (5-10)	詳細不明		櫃本 他1976/西山1986/兵庫県教育委員会1988
40	沢の浦２号墳 (兵庫県篠山市)	円墳（9）	円	横	U2b (5-7)	詳細不明	頭椎柄頭縁金具（二段半円文）/八窓鐔（耳：交互重半円文・平：渦文）/鏁（渦文）付鉄刀	市橋 他1987
41	奥山田遺跡 (和歌山県和歌山市)							尾崎2001
42	石州府５号墳 (鳥取県米子市)	円墳（32）	偏円	横	U4a	詳細不明	無窓鐔（あり）	小原 他1989/米子市1999
43	郊家平１号墳 (鳥取県倉吉市)	円墳（10）	円	複合	U4a?	象嵌装具付鉄刀の切先側から離れて出土	柄頭縁金具（C字状文）/柄縁金具（C字状文）・無窓鐔（耳：交互重半円文・平：渦状文）・鏁（C字状文）付鉄刀	根鈴 他1988/土井1994
44	柳谷古墳 (岡山県津山市)	円墳（7）	弧	横	U3b (5-12)	象嵌頭椎柄頭の近くから単独出土	頭椎柄頭（亀甲繋文）	保田 他1988
45	平岩古墳 (岡山県赤磐市)	古墳	偏円	横	U2a (5-6)	攪乱層出土		二宮 他2006
46	浦江古墳群SO03 (福岡県福岡市)	円墳(21)	円	不明	R2a	単独出土		吉留 他2004
47	竹並D-18-3号横穴墓 (福岡県行橋市)	横穴墓	方	なし？	U1b (5-4)	単独出土		竹並遺跡調査会1979/横田1985/北九州市立考古博物館1987

（3）分類

まず、鋸歯文・鱗状文・羽状文を、それぞれ各資料に施されている構成パターンから、計17種に分類した。対象としたのは47例中45例である。ただし、縁に施されている半円文は、鱗状文には含めずに考えておく。各分類に該当する出土例は、第１表及び第５・６図を参照していただきたい。

【鋸歯文（K）】

１類：縁寄りに１段の鋸歯文が巡るもの。

【羽状文（U）】

１類：半円文もしくは鱗状文と鋸歯文で構成されるもの。半円文と鋸歯文をａ類、鱗状文が２段の半円文のものをｂ類、鱗状文が半楕円文のものをｃ類とする（註３）。

２類：鱗状文もしくは半楕円文と鋸歯文及び頂線で構成されるもの。鱗状文のものをａ類、半楕円文のものをｂ類とする

３類：鱗状文と頂線で構成されるもの。鱗状文の段数が３段以上ものをａ類、２段のものをｂ類とする。

４類：半楕円文と頂線で構成されるもの。頂線が直線のものをａ類、曲線のものをｂ類とする。

５類：縁の半円文と頂線で構成されるもの。

【鱗状文（R）】

１類：半円文を積み重ねた鱗状文が施文されるもの。積み重ねが鱗状に整然としているものをａ類、乱れているものをｂ類とする。

２類：半楕円文を積み重ねた鱗状文が施されるもの。楕円の幅が長さの２倍を超えないものをａ類、２倍以上に長くなるものをｂ類とする。

３類：鱗状文が２段の半楕円文で構成されるもの。

４類：１列の半楕円文のみが施文されるもの。

次に、文様以外の分類要素として、装着方法と形状があげられる。

装着方法は、目釘を用いて固定するものが多い。それには次の３つの方法が認められる。

・横目釘留式：縁から横位に打ち込んだ目釘によって固定する。

・縦目釘留式：頂部から下に向けて打ち込んだ目釘によって固定する。

・複合目釘留式：横と縦両方の目釘が用いられているもの。

出土例のなかには、目釘の認められない例もある。欠損したものでないならば、柄木もしくは鞘木へはめ込むだけで固定したと考えざるを得ない。

形状は、佩表（佩裏）側からみた平面形の端部の形状を対象とするが、見た目による区別であるため、恣意的な判断が入り込むことは否めない。また、劣化による変形も影響を与えるので、あくまでも目安としてではあるが、次の５つに分けられそうである。

・方形：左右ほぼ均等の方形。

・円形：左右ほぼ均等の円形。

・偏円形：左右不均等の偏円形。

・弧状：斜めにカットした形。

・短円形：縁径と長さがほぼ同じで、縁から幅をせばめる寸詰まりのもの。

（４）編年

象嵌文様は、まず元となるモチーフが存在し、そこに新しい要素が取り入れられて発展していく。続いて、単位を大きくして施文数を少なくするなど、なるべく手間をかけずに面積を埋めるようになる省力化が進み、文様が変化していくと考えられる。この仮定に基づくと、おおむね次のような過程をたどることができよう。

羽状文は、鋸歯文と半円文や鱗状文が組み合わさって成立し、頂線が加わって完成形となったと考えられる。その後、鋸歯文は失われ、鱗状文を構成する半円文が半楕円文へと変化し、施文数も少なくなっていく。一方、鱗状文は、細かい半円文が半単位ずれた規則正しい積み重ねから、規則性が崩れ、また半楕円文の積み重ねへと変化する。その後、羽状文と同様に、半楕円文は縦に長く施文されるようになり、単位も減少していく。

この過程を踏まえ、外形や装着方法の要素を加えて、次の８つの段階を設定した。

【第１段階】　Ｋ１類

鋸歯文が施文される。形状は方形である。装着方法は縦目釘のものがみられる。

【第２段階】　Ｕ１類

半円文や鱗状文と鋸歯文が組み合わさる羽状文の初期段階である。形状は方形である。

【第３段階】　Ｒ１ａ類

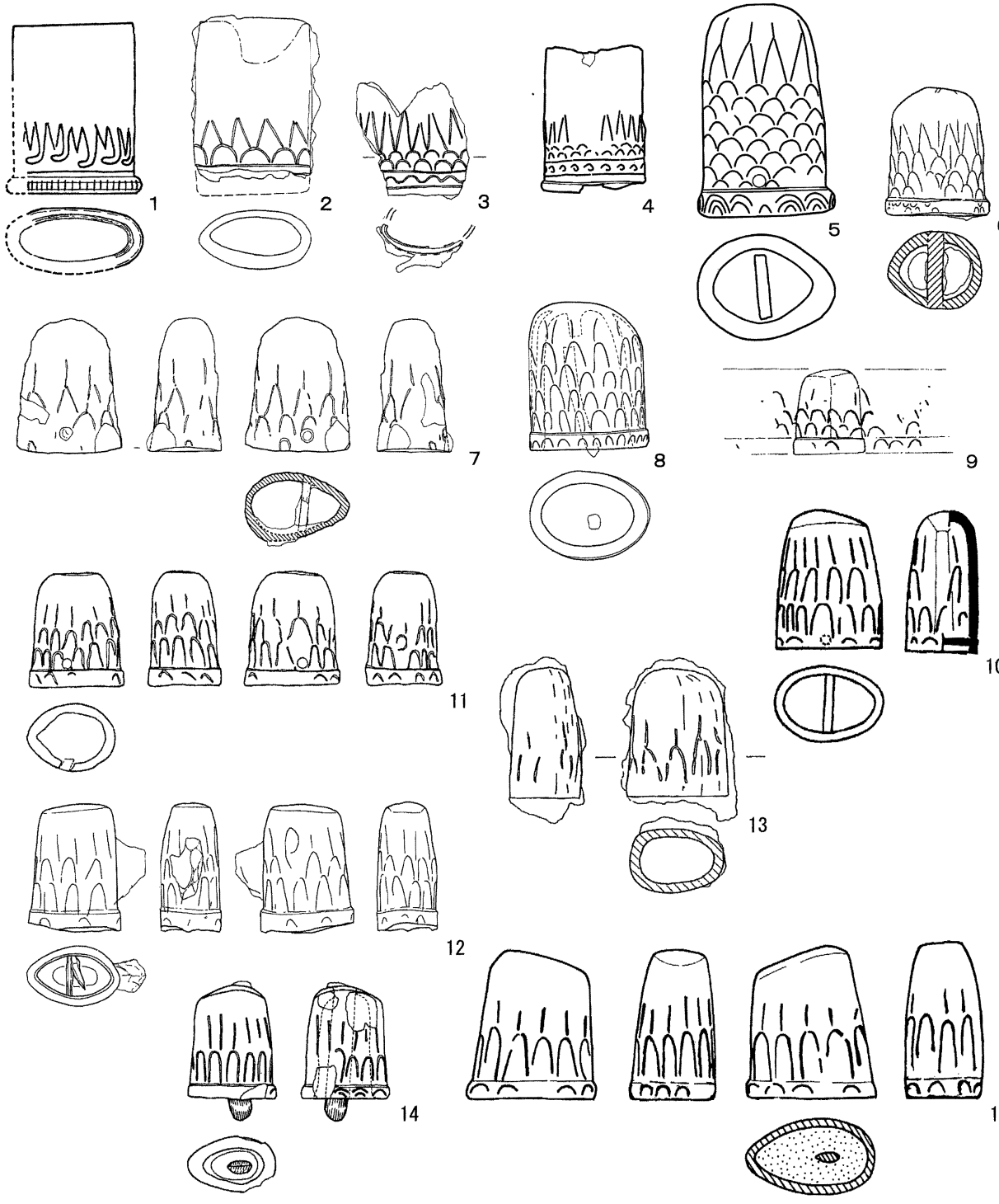
鱗状文が円頭刀装具に施文されるようになる段階である。形状は円形である。

【第４段階】　Ｕ２ａ類・Ｒ１ｂ類・Ｒ２ａ類

羽状文が鱗状文＋鋸歯文＋頂線で構成される。第２段階の羽状文と比較すると鱗状文の段数に隔たりがあるため、３つの文様で構成される羽状文の成立は、第３段階に遡るかもしれない。鱗状文は、半円文の積み重ねが乱れはじめ、一方では、半楕円文へと変化していく。この半楕円文化は、羽状文を構成する鱗状文にもみられる傾向といえる。この段階で横目釘式のものが出現する。形状は円形が多いが、偏円形も認められる。

【第５段階】Ｕ３ａ類・Ｒ２ｂ類

羽状文の鋸歯文が半楕円形となり、鱗状文に吸収されていく。同時に鱗状文の半楕円文も長くなっていく。施文単位は多く、ほぼ全面に施文される。形状は偏円形と方形がある。装着方法は横目

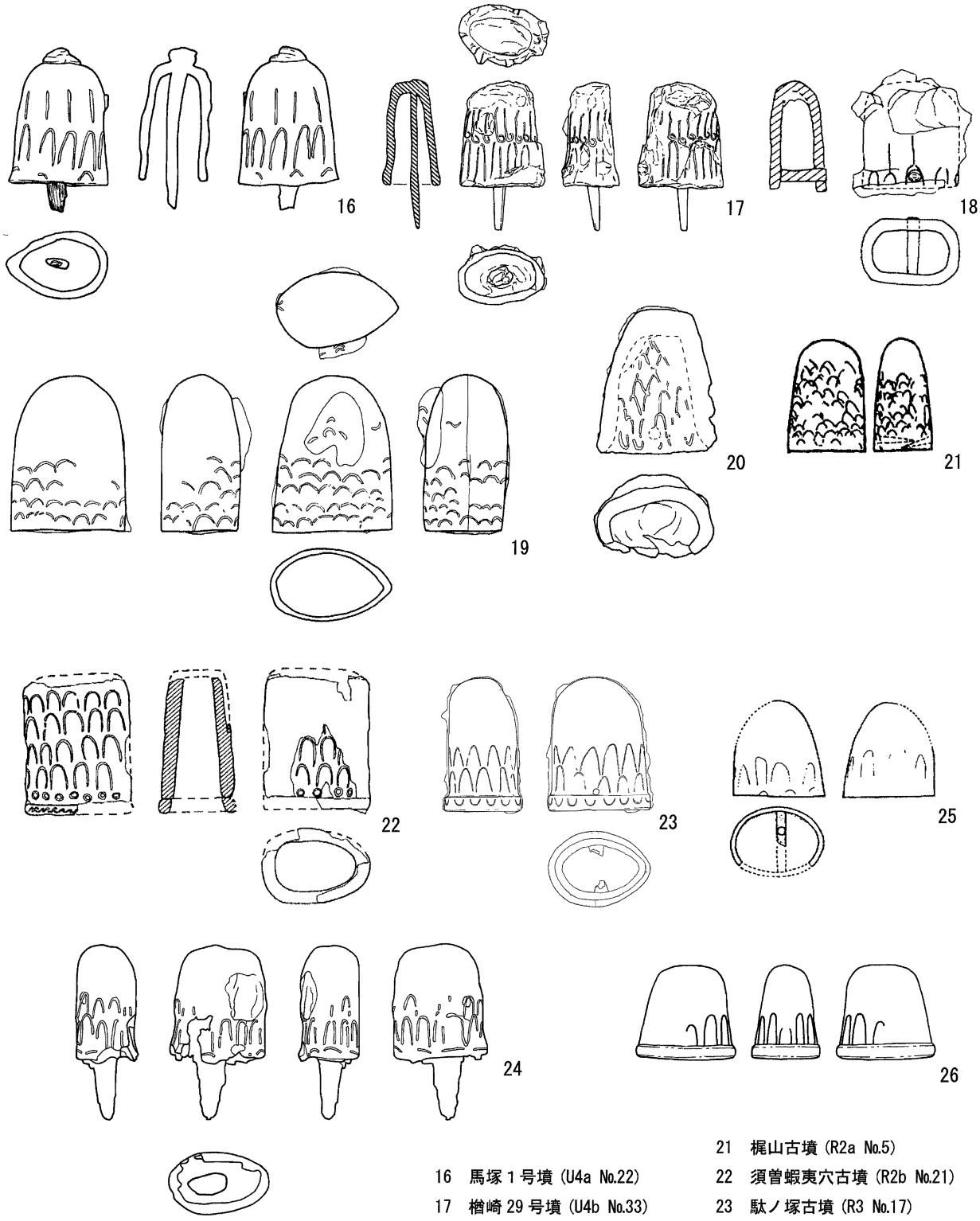


1　台所山古墳（K1 No.9）
2　丸尾山古墳（U1a No.32）
3　井出二子山古墳（U1b No.7）
4　竹並 D-18-3 号横穴墓（U1b No.47）
5　山名原口Ⅱ遺跡２号墳（U2a No.8）
6　平岩古墳（U2a No.45）
7　沢の浦２号墳（U2b No.40）
8　高山 12 号墳（U3a No.35）
9　郭内８号横穴墓（U3a No.4）
10　楯縫古墳（U3b No.39）
11　住社遺跡（U3b No.1）
12　柳谷古墳（U3b No.44）
13　宮之脇２号墳（U4a No.27）
14　湯舟坂２号墳（U4a No.36）
15　本郷大塚古墳（U4a No.25）

0　10cm

第５図　象嵌刀装具の類例（１）（S=1/2）

（No.）は第１表のNo.と同じ



16　馬塚１号墳（U4a No.22）
17　楢崎 29 号墳（U4b No.33）
18　平田 14 号墳（U5 No.31）
19　明ヶ島 15 号墳（R1b No.29）
20　白穴東１号横穴墓（R2a No.2）
21　梶山古墳（R2a No.5）
22　須曽蝦夷穴古墳（R2b No.21）
23　駄ノ塚古墳（R3 No.17）
24　多摩川台９号墳（R3 No.18）
25　荒久台 12 号墳（R4 No.6）
26　四ッ池 19 号墳（R4 No.28）

0　10cm

第６図　象嵌刀装具の類例（２）（S=1/2）

（No.）は第１表のNo.と同じ

釘式が主流となるが、円頭刀装具に縦目釘式のものが出現する。

【第６段階】Ｕ１ｃ類・Ｕ２ｂ類・Ｕ３ｂ類

羽状文の施文単位が縁を除いて３段になる。鋸歯文も一部にみられるが、この段階以降は消失する。鱗状文では出土例はないが、３段の半楕円文で構成される鱗状文を想定できる。形状は円形・偏円形で、方形はこの段階での出土例はない。装着方法は横目釘式である。

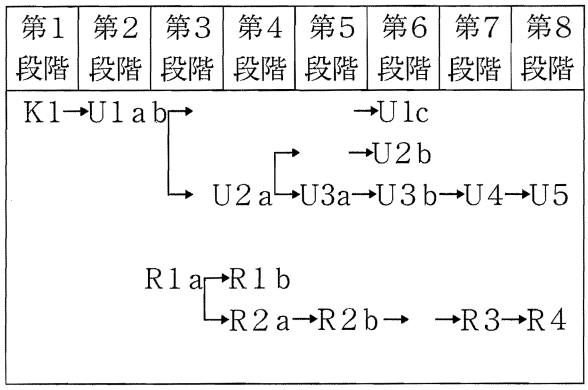
【第７段階】Ｕ４類・Ｒ３類

羽状文・鱗状文の施文単位が、縁を除いて２段になり、羽状文ではＵ４ｂ類のように頂線が曲線化するものも散見される。形状は偏円形が多く、弧状や短円形のものも出現する。装着方法では縦目釘留式のものが増加する。この段階に属する出土例は45例中14例と最も多い。

【第８段階】Ｕ５類・Ｒ４類

羽状文・鱗状文の施文単位が、縁を除いて１段になる。羽状文では頂線のみが施され、縁の半円文とで羽状文が構成される。象嵌施文の最終段階と考えられる。形状は短円形で、装着方法は横目釘留式である。

以上示した段階ごとに、各類の変遷過程を表すと次のようになる。



（５）年代観

第１段階のＫ１類の台所山古墳例は、象嵌装環頭大刀の鞘尻と考えられるが、この環頭大刀はその構造や、鞘口に施された亀甲繋鳳凰文などから、「五世紀後半に百済でつくられ、日本に移入された五世紀型環頭大刀にぞくする」とされている(町田1986)。また、同じくＫ１類の方頭刀装具が出土した長原七ノ坪古墳からは、TK47・MT15型式の須恵器が共伴している（高井1987)。

第２段階に属するＵ１ａ類の丸尾山古墳からは、MT15～TK10型式の須恵器が出土している（門田1999)。また、Ｕ１ｂ類を出土した井出二子山古墳の遺物の帰属時期は、TK23～MT15型式と考えられている（若狭 他2009)。一方、同じくＵ１ｂ類の出土をみた竹並D-18-３号横穴墓には、TK43型式期の須恵器が伴出している（竹並遺跡調査会1979)。

第３段階としたＲ１ａ類の出雲井５号墳からは、MT85～TK217型式の須恵器が出土している（中西1998)。

第４段階から第８段階に属する古墳や横穴墓から出土する須恵器は、TK209型式が中心となる。

以上のような須恵器の共伴関係などを参考に、各段階の年代観を設定すると次のようになる。

第１段階－ TK47型式期

第２段階－ MT15 ～ TK10型式期

第３段階－ TK43型式期

第４段階～第８段階－ TK209型式期

（６）考察

以上のように、鋸歯文・鱗状文・羽状文が施されている円頭・方頭刀装具の変遷を、８つの段階に整理した。今回紹介した児玉郡内古墳例（第３図10）は、羽状文Ｕ１ｃ類に分類されるが、管見では同じ文様パターンに分類される出土例は見当たらない。施文が３段になることから、編年上は第６段階に位置づけ、年代はTK209型式期にあたると推定した。

この種の文様をもつ円頭刀装具を、筆者はかつて鞘尻の可能性が高いという見解を発表したことがある（瀧瀬・野中1996)。一部繰り返しになるが、今回改めてその点について触れておきたい。

穴沢・馬目両氏の鱗状文装飾の大刀に関する論

考では、日本列島から多く出土する単竜鳳環頭大刀に施される鱗状文は、柄頭から鞘尻に向かって積み重なっているもので、竜の鱗、鳳凰の羽毛を表すものと指摘されている（穴沢・馬目1979）。単竜鳳環頭大刀に続いて列島内で作成されるようになった、円頭大刀などの象嵌装大刀の文様に、その意匠が受け継がれていることは、柄頭に亀甲繋竜鳳文が施文されることからも明らかである。したがって、鱗状文、そして鱗状文で構成される羽状文もまた動物文であり、その施文の方向は鞘尻に向かって積み上げられると考えられる。羽状文の祖形となる鋸歯文のもつ意味は明らかではないが、鋸歯文や古式の羽状文が施される方頭刀装具が鞘尻であることはまず確実である。したがって、羽状文・鱗状文の施された円頭刀装具のうち、少なくとも第３段階から第４段階にかけてのものは、鞘尻である可能性が高いと判断してもよいのではないだろうか（註４）。

実際の出土状況をみてみると（第１表参照）、鞘尻である出土例（№26・31）や、その可能性の高い出土例（№11・21・30）がいくつか認められる一方で、確実な柄頭の例は、第７段階に位置づけたＲ３類の桶川市原山23号墳出土例（№12）のみである（註５）。

先に示した文様の変遷からも明らかなように、象嵌装大刀の製作の最盛期となるTK209型式期には、徐々に施文の単位が少なくなり、形骸化の一途をたどっていく。それは、もはやその本来の意味が失われてしまったことを意味するものであり、第５段階以降になると、鞘尻だけではなく柄頭にも鱗状文や羽状文が施されるようになっていくと考えられる。第７段階における出土例の増加は、こうした文様の「制約」が解放された結果と理解できるのかもしれない。

もうひとつ、金具の固定方法という観点からみてみよう。縦目釘留式は、本来方形の鞘尻（角尻）を固定するために用いられた技法であるため、円頭刀装具がこの方法で固定されている場合、それは鞘尻（丸尻）である可能性は高いかもしれない。しかし、横目釘と縦目釘の両方で柄頭を固定している原山23号墳例をみても分かるように、この区別も絶対的なものではなく、縦目釘留式が普及していくなかで、円頭柄頭の固定にも用いられるようになっていくと考えられよう。

さらに形状の点からみると、形だけでは柄頭か鞘尻かの区別の判断は難しい。しかし、少なくとも短円形のものは、円頭柄頭として用いられている可能性が高いと思われる。

４　まとめ

今回の旧県博の収蔵品を資料化する作業の過程で、10点の鉄製刀装具のうち４点から象嵌文様が確認された。これは、出土遺跡が未確定であることを差し引いても、価値ある発見といえよう。これらの刀装具を含む、児玉郡内古墳出土の一連の鉄刀や刀装具は、鉄刀の型式や象嵌文様の編年観などから、６世紀末を中心とする年代に属するものと考えられる。

鋸歯文・羽状文・鱗状文を象嵌する刀装具について、その文様の分類から、８つの段階を設定しその変遷の過程を追った。本来は鞘尻に施される意味をもった文様が、量産化に伴い形骸化していき、柄頭にも施されるようになることを指摘した。象嵌文様の施された円頭刀装具が、柄頭か鞘尻かどちらにあたるのかの判断は、文様の分析に加えて、出土状況・装着方法など、多角的な視点から考えなければならない。

本稿を草するにあたって、下記の方々にはたいへんお世話になりました。末筆ながら記して感謝の意を表します。

新井　端　大川　操　大谷宏治　尾崎　誠
門田了三　金子彰男　関根　訪　田村　誠
藤沼昌泰　（敬称略・五十音順）

なお、本稿は平成22年度研究助成の成果である。

註１　Ｘ線透過調査の結果、耳にＣ字状文の象嵌が発見された。

註２　筆者によるＸ線透過調査で明らかとなったものである。各関係機関のご厚意で掲載させていただいた。

註３　羽状文Ｕ１類は、共に施される文様の相違などから、さらなる細分化の余地がある。今後の資料の増加に期待したい。

註４　鱗状文を、亀甲繋文の六角形の区画だけが残ったものという見解（高橋2002）もあるが、その変遷過程を示す出土例はなく、賛同できない。

註５　瀧瀬・野中1996では、多摩川台９号墳の円頭刀装具を、内部に茎が残る例として柄頭と紹介したが、その後に増加した類例との比較から、内部の金具は縦目釘の可能性が高いと考えられる。

引用・参考文献

穴沢咏光・馬目順一　1979「日本・朝鮮における鱗状紋装飾の大刀」『物質文化』33　pp１-25　物質文化研究会

泉森　皎 他　1992『本郷大塚古墳』 須坂市教育委員会

市橋重喜 他　1987『沢の浦古墳群』兵庫県文化財調査報告書第48集　兵庫県教育委員会

伊藤幸司　1988「遺物の健康診断　金属製品のレントゲン検査」『葦火』15号　ｐ５　（財）大阪市文化財協会

伊藤英晃 他　1987『平田古墳群』安濃町遺跡調査会

いわき市　1971『いわき市史』別巻 中田装飾横穴

岩原　剛　2006「飾大刀集成　美濃」『東海の馬具と飾大刀』 pp157-159　東海古墳文化研究会

臼杵　勲　1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号　pp49-70　古墳文化研究会

梅沢重昭・白石竹雄・諸星政得　1957「東京都大田区田園調布荏原古墳群第四号・第九号墳発掘調査報告」『武蔵野』231･232合併号　pp24-43　武蔵野文化協会

奥村清一郎・新納　泉　1983『湯舟坂２号墳』久美浜町文化財調査報告第７集　久美浜町教育委員会

尾崎　誠　2001「保存処理を実施した象嵌資料」『元興寺文化財研究』№78　pp１-６　（財）元興寺文化財研究所

小原貴樹 他　1989『石州府古墳群発掘調査報告書』 米子市教育委員会・石州府古墳群調査団

柏木善治　2004「神奈川県内における古墳出土鉄製品の形態的検討－大刀・鉄鏃について－」『研究紀要９　かながわの考古学』 pp117-132　（財）かながわ考古学財団

加藤裕之 他　1986『四ッ池古墳群』（財）浜松市文化協会

門田了三　1999 『横山古墳群』 名張市遺跡調査会

北九州市立考古博物館　1987『「北九州の横穴墓」展』

岐阜県博物館　1983『岐阜県の考古遺物－発掘調査10年の出土品－』

木村俊彦 他　1986『寺前古墳群　大道古墳』滑川町文化財調査報告書第３集　滑川町教育委員会

埼玉県　1951『埼玉県史』第一巻　先史原史時代

埼玉県　1982『新編埼玉県史』資料編２ 原始・古代 弥生・古墳

埼玉県　1991『新編埼玉県史』通史編７ 現代

埼玉県教育委員会　1977『埼玉県教育史』第七巻

埼玉県立博物館　1979『埼玉県立博物館有資料目録Ｉ』（埼玉県立文化会館収蔵資料）

埼玉県立博物館　1984『岩手・埼玉文化交流展　北武蔵　杖刀人とその時代』

埼玉県立博物館　1992『埼玉県立博物館有資料目録IX』（昭和62年～昭和63年）

埼玉県立文化会館　1963『埼玉文化月報』第128号

齋藤秀一 他　2001『茶臼山古墳群』武生市埋蔵文化財調査報告21　武生市教育委員会

崎山正人　1993『下山古墳群Ⅱ』福知山市文化財調査報告書第22集　福知山市教育委員会

崎山正人　1994『下山古墳群Ⅲ』福知山市文化財調査報告書第25集　福知山市教育委員会

塩野　博 他1978『川田谷古墳群』桶川市文化財調査報告書第10集　桶川市教育委員会

塩野　博・増田逸朗　1970『西台遺跡の発掘調査』埼玉県遺跡調査会報告第５集　埼玉県遺跡調査会
静岡県　1992『静岡県史』資料編３　考古三
清水久男　1995「多摩川台古墳群９号墳出土の銀象嵌装大刀」『大田区立郷土博物館紀要』第５号　pp189-202　大田区立郷土博物館
澁谷恵美子編　2007『飯田における古墳の出現と展開－資料編－』　飯田市教育委員会
白石太一郎 他　1996『千葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告』国立歴史民俗博物館研究報告第65集　東国における古墳の終末《附編》国立歴史民俗博物館
白河市歴史民俗資料館　1983『新発見の考古資料 昭和47年度～57年度』
鈴木　勉2004「弘法山５号、中田、郭内８号各横穴墓から出土した象嵌遺物の復元」『福島県文化財センター白河館研究紀要』2003　pp58-64　福島県教育委員会
関　義則・宮代栄一　1987「県内出土の古墳時代の馬具」『埼玉県立博物館紀要』14　pp３-55　埼玉県立博物館
高井健司　1987「城下マンション（仮称）建設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG85-23）略報」『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』　pp149-185　大阪市教育委員会・(財) 大阪市文化財協会
高崎市観音塚考古資料館　2008『光と力 縄文から観音塚古墳まで』
高島好一・馬目順一　2010『神谷作106号墳・白穴横穴群』いわき市埋蔵文化財調査報告第141冊　いわき市教育委員会
高橋　満編　2002『弘法山のよこあな－古代ガラスと象嵌の世界－』　福島県教育委員会
瀧瀬芳之　1991「埼玉県の拵付大刀」『研究紀要』第８号　pp101-126　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
瀧瀬芳之・野中　仁　1996「埼玉県内出土象嵌遺物の研究－埼玉県の象嵌装大刀－」『研究紀要』第12号　pp37-94　(財)　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
瀧瀬芳之・野中　仁　1997「象嵌遺物の保存処理」『考古資料保存研究会だより』№1　pp２-６　考古資料保存研究会
竹並遺跡調査会　1979『竹並遺跡』　東出版寧楽社
田村　誠　1996a『青柳古墳群の発掘調査から』　神川町教育委員会
田村　誠　1996b『青柳古墳群四軒在家支群』神川町教育委員会文化財調査報告第13集　神川町教育委員会
寺島文隆 他　1981『郭内横穴墓群発掘調査報告Ⅰ』白河市埋蔵文化財調査報告書第４集　白河市教育委員会
土井珠美　1994「鳥取県郊家平古墳群の鉄器について」『文化財学論集』　pp185-194　文化財学論集刊行会
東京国立博物館　1983『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇（関東Ⅱ）
冨田和気夫　1992『須曽蝦夷穴古墳』　能登島町教育委員会
冨田和気夫 他2001『史跡　須曽蝦夷穴古墳Ⅱ－発掘調査報告書－』　能登島町教育委員会
豊島直博　2001「古墳時代後期における直刀の生産と流通－近畿地方を中心に－」『考古学研究』第48巻第２号　pp82-100　考古学研究会
中島勝国 他　1976『宮之脇遺跡発掘調査報告書』岐阜県教育委員会
中西克宏　1998『出雲井遺跡第１次発掘調査報告書』(財) 東大阪市文化財協会
長野県史刊行会　1983『長野県史』考古資料編 全１巻（３）主要遺跡（南信）
長野県史刊行会　1988『長野県史』考古資料編 全１巻（４）遺構・遺物
中村方彦 他　1991『住社遺跡・荒町遺跡・寺前遺跡・田町裏遺跡』角田市文化財調査報告書第７集　角田市教育委員会
新納　泉　1982「単竜・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第４号　pp110-141　史学研究会
西山要一　1986「古墳時代の象嵌－刀装具について－」『考古学雑誌』第72巻第１号　pp１-30　日本考古学会
二宮治夫 他　2006『来光寺跡・来光寺遺跡・立道遺跡・平岩古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告199　岡山県教育委員会
根鈴輝雄 他　1988『郊家平古墳群発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第46集　倉吉市教育委員会

橋本博文　1993「亀甲繋鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論聚－久保哲三先生追悼論文集』 pp221-256　久保哲三先生追悼論文集刊行会
秦野市桜土手古墳展示館　2010『開館20周年記念特別展「発掘された秦野の古墳」』
櫃本誠一 他　1976『楯縫古墳・岩倉古墳群調査報告書』日高町文化財調査報告書第３集　日高町教育委員会
兵庫県教育委員会編　1988『きらびやかな黄泉の国 但馬の埋蔵文化財展図録』 兵庫県立円山川公苑美術館
福島　甫　1925「間の山古墳台所山と其の発掘品」『上毛及上毛人』第102号　pp１-４　上毛郷土史研究会
福田敬一・神戸聖語　1991『山名原口Ⅱ遺跡』高崎市文化財調査報告書第111集 高崎市教育委員会
本田　洋 他　2003『楢崎古墳群』多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書第12集　多賀町教育委員会
益子町　1987『益子町史』第１巻 考古資料編
増田逸朗 他　1977『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集　埼玉県教育委員会
増田孝彦　1988「高山古墳群（12号墳）出土の象嵌をもつ刀装具」『京都府埋蔵文化財情報』第30号　pp38-40　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
増田孝彦 他　1988『京都府遺跡調査概報　第29冊　丹後国営農地開発事業（丹後東部・西部地区）関係遺跡昭和61・63年度』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
町田　章　1986「環頭大刀二三事」『山陰考古学の諸問題』 pp277-300　山本清先生喜寿記念論集刊行会
汀　安衛 他　1981『常陸梶山古墳』 大洋村教育委員会
三田敦司　2010『古墳時代遺跡調査報告書』吉良町埋蔵文化財発掘調査報告書第５集　吉良町教育委員会
宮坂光昭　1967「長野県茅野市釜石古墳」『信濃』第Ⅲ期第19巻第４号　pp62-74 信濃史学会
村岡恭子　1989『松本23号古墳発掘調査報告書』 邑楽町教育委員会
村岡恭子・関　邦一・徳江秀夫　1998「邑楽町松本23号古墳出土の象嵌大刀」『研究紀要』15　pp35-58（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
室内美香 他　2003『東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書　二子塚古墳群・明ヶ島古墳群・土製模造品の調査　他』 磐田市教育委員会
森　幸彦　2004「福島県内出土の象嵌資料」『福島県文化財センター白河館　研究紀要』2003　pp32-45　福島県教育委員会
矢口忠良 他　1981『湯谷古墳群 長礼山古墳群 駒沢新町遺跡』長野市の文化財第10集　長野市教育委員会
保田義治 他　1988『柳谷古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第24集 津山市教育委員会
横田義章　1985「古墳時代の象嵌文様―九州の諸例紹介を中心に―」『九州歴史資料館研究論集』10　pp83-93　九州歴史資料館
吉留秀敏 他　2004『金武１』福岡市埋蔵文化財調査報告書第792集　福岡県教育委員会
米子市　1999『新修米子市史』第７巻 資料編 考古 原始・古代・中世
若狭　徹 他　2009『史跡保渡田古墳群 井出二子山古墳　史跡整備事業報告書』高崎市文化財調査報告書第231集　高崎市教育委員会
若松良一　1985「比企地方の円筒埴輪」『第６回３県シンポジウム　埴輪の変遷―普遍性と地域性―』 pp29-41　北武蔵古代文化研究会 他

図版出典

第１～４図　筆者実測・デジタルトレース（象嵌は４図４を除きＸ線写真を参考に作図）。

第５・６図　４は北九州市立考古博物館1987所載写真より作図。５は福田・神戸1991の実測図をもとに、高崎市観音塚考古資料館2008所載の写真より作図。それ以外は各文献（第１表参照・複数ある場合はゴシックで表記）より転載（一部改変・省略したものもあるが、ご寛恕いただければ幸いである）。

設立30周年記念

研究紀要 第25号

2011

平成23年３月14日　印　刷
平成23年３月24日　発　行

発　行　財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369－0108　熊谷市船木台四丁目４番地１
http://www.saimaibun.or.jp
電　話　0493－39－3955

印　刷　株式会社文化新聞社